

# 小学校高学年における教科担任制の導入について

平成26年3月 岩手県教育委員会事務局学校教育室

## I 滝沢市立滝沢第二小学校の実践（平成23年度～25年度モデル指定校）

### 1 教科担任制実施概要

#### (1) 学校規模と導入方式

各学年3クラスと特別支援学級3クラスの計21クラス。教科担任制については、第5・6学年の「算数」「理科」「音楽」「書写」において教科担任の形で実施。

導入に当たって児童の戸惑いが考えられることや、小学校においては、学級担任が学級の児童の指導を主に行うことが児童の発達段階に適していると判断したため「学級担任制を基盤とした教科担任制」を採用。

#### (2) 算数・理科・音楽・書写を教科担任で指導する理由

- ア 学習内容の深まりに対応して、専門的な技術や指導力が必要になる。
- イ 教材や実験の準備に時間がかかる。
- ウ TTや習熟度別学習など多様な学習形態をとることができる。

### 2 導入に当たって

#### (1) 教科担任制を進めるうえでの前提条件

実際に教科担任制を3年間導入してきて、効果的な導入の前提条件として次の3点が大切であると確認することができた。

- ア 教科担任は担当する教科に対して、一定水準の指導力、児童理解力、対応力、統率力が備わっていて、学習指導を行うことができること。
- イ 学習規律が確立しており、児童が混乱することなく、担任以外の教員の指導を受け入れられること。
- ウ 教科担任、学級担任とも共通の指導観をもち、情報を共有しながら協働して児童の指導にあたること。

#### (2) 導入に至るまでの校内での検討過程

- ア 総務委員会で説明（概要、期間は3年、ゴールはモデルを全県に普及し県全体の学力向上）
- イ 職員会議で全教職員に周知
- ウ 基本方針の策定（「期待される効果」、「指導体制・時間割」、「3年間のスケジュール等」）
- エ 第5・6学年の教職員体制、算数及び理科教科担任の決定
- オ 推進検討委員会開催（県、教育事務所、村教委、校長、関係教員等で推進上の留意点についての確認）

#### (3) 導入過程とその後における留意点

- ア 学級担任制に慣れた教師にとって、自分の学級に他の指導者が入ることに対する抵抗がある。したがって導入に当たっては、該当学年だけでなく全職員で明確な見通しをもつことと、メリット・デメリットについて、共通理解をして進める必要がある。
- イ 児童や保護者に教科担任制を取り入れる目的とよさ、進め方について説明する。
- ウ 教科担任制導入後も、実態に応じて指導の形態を変更していくことも必要となる。本校では、算数科において、学級担任とのTTを行うことで、習熟度別の編成にしたり、個別指導の形態をとったり、教科担任主導と学級担任主導の切り替えをしたりして多様な指導を行うことができた。

### 3 取組の実際

#### (1) 研究推進に係る役割分担

学校長 : 全体総括、校内体制整備

副校長 : 小中学校間の連携

主幹教諭 : 県・市教委との連携、高学年の時間割調整、取組の検証  
(カリキュラムコーディネーター)

教務主任 : 時間割や特別教室の調整、9年カリキュラムの検討

生徒指導主事 : 生徒指導における担任と教科担任の橋渡し

研究主任 : 授業(学習)規律・家庭学習の与え方についての提案、意識調査等による検証

学級担任 : 学級児童の掌握、児童についての情報収集、情報提供

教科担任 : 授業実践と効果的な学習方法の検討、教材・教具の開発

※教科担任は5年または6年の学年所属とし、学年経営や学年行事にも担任団の一員として関わっていく。

#### (2) 指導体制について(平成25年度)

ア 第5学年…3学級担任(ABC) + 担任外:算数・音楽教科担任(D)

イ 第6学年…3学級担任(DEF) + 担任外:算数教科担任(H)

ウ 理科教科担任(第5・6学年を指導)…(I)

エ 第5・6学年書写…(J)

の10人体制

#### (3) 教科担任教員の担当時数について

学級数に応じた教科週時数は次のとおりであり、これによる教科担任数を示した。

	1学年1学級	1学年2学級	1学年3学級	1学年4学級	1学年5学級
第5・6学年で算数	10h	20h	30h	40h	50h
担当者数	1人	1人	2人	2人	3人
第5・6学年で理科	6h	12h	18h	24h	30h
担当者数	1人	1人	1人	2人	2人

- ・ 算数では2～4学級、理科では2～5学級が教科担任制の適性規模と考える。
- ・ 理科においては、1学年2学級規模であれば12hと担当時数は少ないが、実験等の準備や片づけの時間を考慮すれば実施する意義があると考ええる。

本校は1学年3学級であるので、上記の表を受け、以下のように担当時数の割り振りを行った。

A) 第6学年の算数⇒週5時間×3学級=15時間(1名)

B) 第5・6学年の理科⇒週3時間×6学級=18時間(1名)

C) 第5・6学年の書写⇒週1時間×6学級=6時間(1名)

D) 第5学年の算数、音楽⇒週5時間×3学級+週1～2時間×3時間=18～21時間(1名)

#### (4) 推進に係る方針・留意点

ア 1校時は、学級担任の指導を基本とする。(児童の健康と心理状態の観察把握の必要があるため)

イ 教科担任の指導時間は、学級担任は空き時間とし教材研究に当たるが、算数の時間に関しては、TTによる授業補助やコース別少人数指導に当たる。

ウ 学級担任の空き時間は

第5学年：週5～6時間（理科3＋書写1＋音楽1～2）

第6学年：週4時間（理科3＋書写1）

エ その他必要により、教科担任教員の授業参観(児童観察)や担任学級の児童の個別指導に当たる。

オ 教科担任教員の空き時間は、教材研究、打ち合わせ、宿題点検等に当てることを基本とする。

カ 教科担任教員が出張等で不在の場合は学級担任による授業に変更し、関係教科（算、理、音、書）は別の日に設定する。（可能な限り自習としない）

キ 理科と音楽は優先して時間割を設定する。理科室・音楽室で学習することを基本とする。

ク 複数のクラスを指導する場合、常に特定のクラスだけが先に学習することがないように配慮して、時間割の設定をする。（例えば、月曜：1組⇒2組⇒3組 火曜：2組⇒3組⇒1組のように）

### （5）加配による取組と加配によらない取組

ア 加配による取組（1名の加配の活用状況）

（ア）第5・6学年の理科を3クラス担当する。

（イ）時数は週あたり、（3時間×6クラス＝18時間）

教科担任時間割表(5・6年理科)					
	月	火	水	木	金
1校時			6-2		
2校時	6-3		6-1	5-1	6-2
3校時	6-2	5-2	5-2	5-2	6-3
4校時	5-1	6-3	5-3	5-3	6-1
5校時	5-3	6-1	5-1		
6校時	委ク				

イ 加配によらない取組

（ア）少人数加配教員を活用した算数の指導

（イ）担任外教員（主幹教諭、教務主任、生徒指導主事、研究主任等）による教科指導

（ウ）教科と週当たりの担当時間数は以下の通りである。

#### <平成23年度>

- ① 主幹教諭…5年生書写（1時間×3クラス）＋5年生算数（5時間×1クラス）＝8時間
- ② 教務主任…6年生書写（1時間×3クラス）＝3時間
- ③ 少人数加配教員…5年生算数（5時間×2クラス）＋6年生算数（5時間×3クラス）＝25時間

#### <平成24年度>

- ① 主幹教諭…5年生書写（1時間×3クラス）＋6年生書写（1時間×3クラス）＝6時間
- ② 研究主任…5年生算数（5時間×2クラス）＝10時間
- ③ 生徒指導主事…5年生算数（5時間×1クラス）＝5時間
- ④ 少人数加配教諭…6年生算数（5時間×3クラス）＋6年生音楽（2時間×3クラス）

#### <平成25年度>

- ① 主幹教諭…5年生書写（1時間×3クラス）＋6年生書写（1時間×3クラス）＝6時間
- ② 生徒指導主事…6年生算数（5時間×3クラス）＝15時間
- ③ 少人数加配教諭…5年生算数（5時間×3クラス）＋5年生音楽（2時間×3クラス）

## 4 成果と課題

### (1) 取組全般

#### □成果

- ア 教科担任は自分の専門性を生かし、教材研究や教材開発に時間をかけることができるため、指導方法や指導内容の充実を図ることができた。
- イ 学級担任は、教科担任の指導を見ることで、担任する学級の児童について客観的に観察することができ、児童理解を深めることができた。
- ウ 学級担任に空き時間を設定することができ、その時間を活用して学級事務や授業の準備にあてることができた。
- エ 学級担任と教科担任が担任団としてチームを組んで学年児童の指導にあたることができた。
- オ 担任外の教師が教科担任として高学年の児童に触れ合うことで、児童理解が深まり、生徒指導等に役立てることができた。
- カ 学級担任制を主としながらも、一部教科担任制を取り入れることで、中学校における教科担任制に対する抵抗感が少なくなり、小中学校間における学習面での段差解消に役立てることができた。(小中連携による中学校からの情報から)
- キ 教科担任は、45分間で授業を完結させなければならないので、授業のテンポアップや効率的な進め方を工夫する必要があり、授業改善に役立てることができた。

#### ■課題

- ア 学年をまたいでいる教科担任は、学年行事(修学旅行や林間学校など)に参加する場合他の学年の授業ができなくなるため、時間割の調整が必要である。
- イ 運動会や学習発表会などの練習のため時間割が変更になる場合調整が難しい。
- ウ 1時間目の授業は学級担任の授業とすることが原則であったが、5学年においては時間割の編成上原則に沿えない学級があった。朝の会が時間通りに終わらないと、45分の授業時間を確保することが難しくなる場合があった。
- エ 持ち時間の少ない教科担任の授業を月曜日に入れると代休等で授業ができなくなってしまう、調整することが多くなってしまった。
- オ 欠席した児童に対する補充指導の時間を設定することが、教科担任には難しい。
- カ 多くの児童を指導する教科担任は、児童の名前を覚えることが難しく、座席表や名札の着用などの手立てをとる必要がある。

## (2) 教科指導の特色と成果・課題

### 【算数】

ア 教科指導の特色（重点として取り組んできたこと）

(ア) 児童の個人ノート作りの重視

- ① 学習の成果（既習事項）を生かすために、分かり易いまとめ方を工夫した。
- ② 自分の考えや友達のことを「吹き出し」を利用してノートに記入させた。
- ③ 「学習の振り返り」として、授業の最後に自己評価させた。

(イ) 自力解決の場の設定

- ① 一人一人が自分の考えをもち学び合いに参加できるように、「分からないこと」や「自信のない考え」も自由に話せる場を設定するように努め、児童の発言を授業の中で生かすようにした。

(ウ) 授業の構造化

- ① 板書に児童の発言を位置づけ、思考が深まる手立てとした。
- ② 「算数コーナー」を各教室に設置し、既習事項を想起し易くなるように工夫した。

イ 成果と課題

□成果

(ア) 教科担任と学級担任とがチームを組んで指導に当たることで、多くの児童に個別に対応することができた。

(イ) 既習事項を意識して学習する児童が増えてきている。

(ウ) 学級担任と児童の様子について話す機会を設けることで、児童理解が深まり、指導に役立った。

(エ) 教材の準備やノート指導のための時間を確保することができ、学習を深めることができた。

■課題

(ア) 「算数コーナー」のような既習事項を掲示するスペースを、教室掲示計画に組み込む必要がある。

(イ) 学級担任とチームを組んで指導する場合、打ち合わせの仕方や時間、効果的な指導形態の工夫を今後も検討していく必要がある。

(ウ) 家庭学習や宿題の内容について、学級担任との連携をとっていく必要がある。

### 【理科】

ア 教科指導の特色（重点として取り組んできたこと）

(ア) 実験や観察といった体験学習を重視した授業の構築に努めた。

(イ) 体験活動を重視するために、少人数グループによる学習を進めた。

(ウ) 視聴覚機器を積極的に活用した教材提示を行った。

(エ) 理科室での活動（時間割固定）を中心として、学習環境の整備に努めた。

イ 成果と課題

□成果

(ア) 少人数グループのため、児童個々の役割がはっきりし、一人一人が主体的に学習に関わることができた。

(イ) 実際に実験や観察を行うことで、理解が深まった。

(ウ) 視聴覚資料の活用で、児童の興味関心を深めながら学習を進めることができた。

■課題

(ア) 異なる学年が2コマ連続していると実験準備が間に合わないこともあるので、時間割作成時に考慮する必要がある。

(イ) 45分間の授業時間を厳守しなければならないので、より計画性のある授業が必要となる。

(ウ) 家庭学習を課す場合には、担任と連絡して他教科との調整が必要となる。

## 【音楽】

ア 教科指導の特色（重点として取り組んできたこと）

(ア) 「言語活動の充実」を意識して、各単元で場の設定を工夫しながら、表現のよさや工夫を交流できるようにした。

(イ) 教材研究をしっかりと行うことで以下のことができるように心がけた。

① 楽しい、おもしろい、やってみたいという意欲が向上するような授業の内容にすること。

② 一人一人の子供が、基礎となる音楽の技能をしっかりと身に付け、活用できるようにしていくこと。

③ 「こうしたい」「こう表現したい」という思いをもち、学習に向かえるようにすること。

(ウ) 学級担任との情報交換を密にし、学年経営の一部として機能できるようにした。

イ 成果と課題

□成果

(ア) 児童の学習感想には「音楽が楽しい」「もっといろいろな活動をやってみたい」という記述が多く、意欲の向上が見られる。

(イ) 主に歌唱を通して、学年全体で音楽を作り上げる楽しさを感じとり、学習に満足感が得られるようになってきた。

(ウ) 学級担任と児童の様子について情報交換することで、教科の目標を共有するとともに、生徒指導的な面でも協力して指導にあたることができた。

■課題

(ア) 学習指導要領の「共通事項」を活用しながら指導にあたっているが、子どもたちが音楽的要素を自由に使いこなすまでにはいたっていない。継続した指導が必要である。

(イ) 学校行事等の関係で、教科の時数を確保するために時間割変更が必要となり指導計画通りに指導することが難しかった。

## 【国語（書写）】

ア 教科指導の特色（重点として取り組んできたこと）

(ア) 短時間で効果的な学習ができるように、練習用紙を工夫し、技能が確実に身に付くように心がけている。

(イ) 文字の組み立て方や紙面の構成などについては、視覚的に理解し易いように指導資料を工夫している。

(ウ) 筆遣いや筆脈については、実際に筆の動きを示範したり、映像資料を活用したりして視覚的に説明している。

(エ) 選択式の練習用紙や、児童が自分で課題に沿った練習用紙を作成する等、個人の課題を解決するための手立てを工夫した。

イ 成果と課題

□成果

(ア) 複数の学級で同じ内容を指導するので、教材準備の負担を軽減できた。

(イ) 作品を評価する場合、一人の教師が評価するので、統一した評価基準で適正に評価することができた。

(ウ) 専門的な技術について指導を徹底することができ、児童の書字能力が向上してきた。

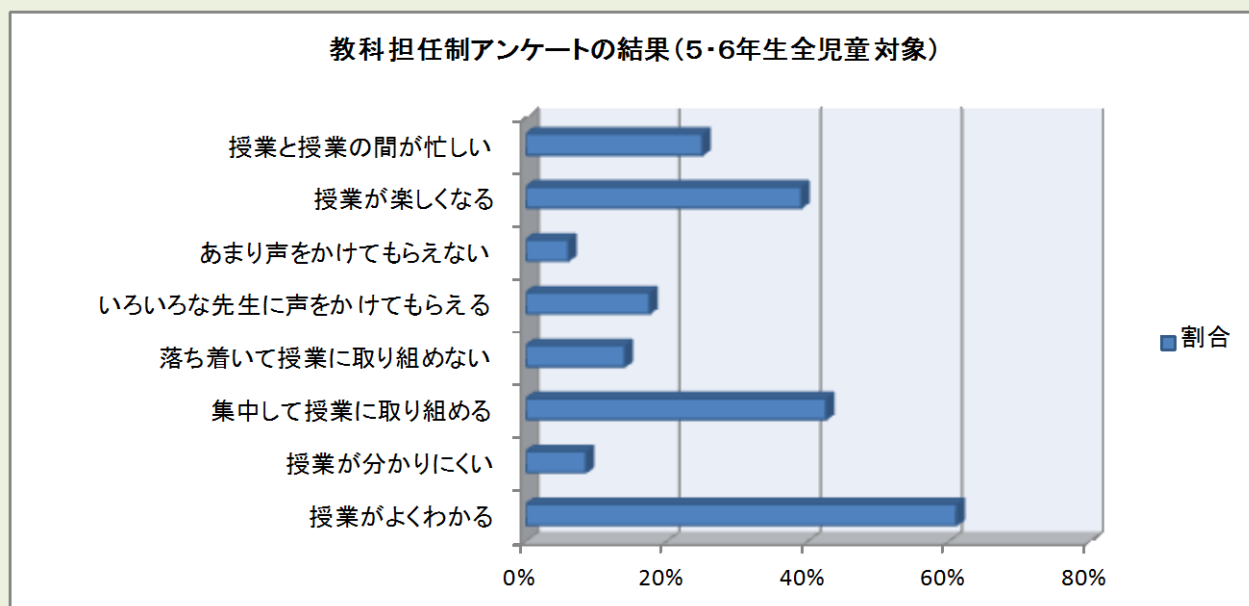
■課題

(ア) 作品の掲示場所や学習用具の保管場所について学級担任と教科担任が事前に打ち合わせを行う必要がある。

(イ) 道具の準備や後片付けに時間がかかると、次の時間に影響がでてしまうので手際よく行えるように指導する必要がある。

### (3) アンケート、諸調査結果からの検証

#### ア 児童アンケートの結果（平成24年度実施）と分析



平成24年度の3学期末に第5・6学年全児童を対象に、教科担任制についてのアンケート調査を行った。児童は8つの設問に対して選択肢の中から自分にあてはまるものを回答した。また、自由記述欄に教科担任制に対する感想と今後の要望について記述した。結果は上記の通りである。

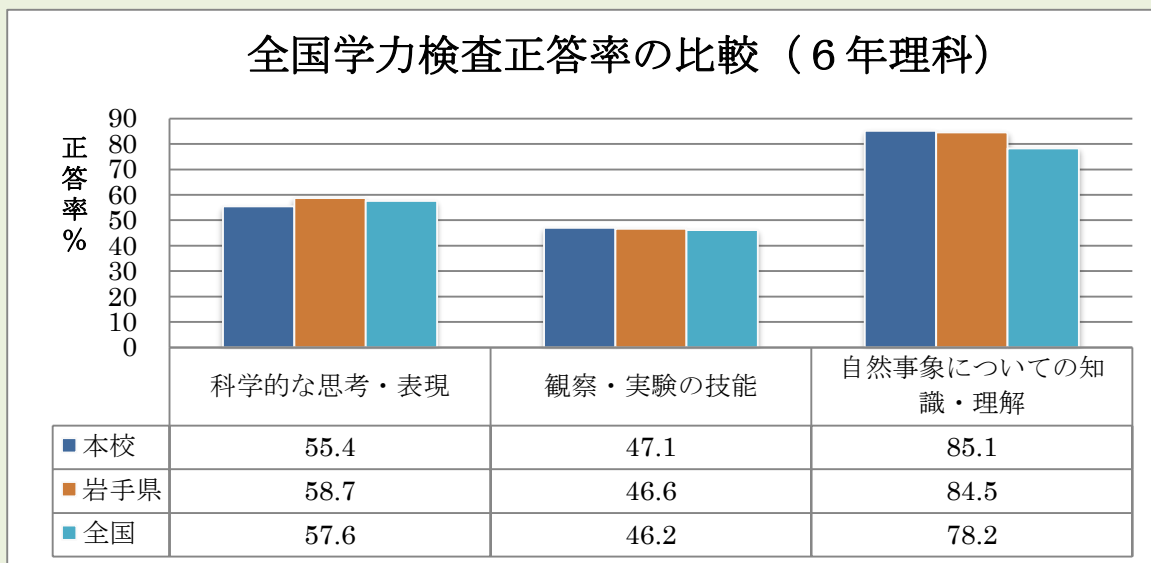
#### <児童アンケートの分析>

- ・ 授業と授業の間が忙しいと答えた児童が23%なので、余裕をもって次の時間に取りかかれるようにすることや担任と教科担任とがどのように連絡を取り合っていくかが今後の課題である。
- ・ 声をかけてもらえる機会が増え、意欲の向上が見られる
- ・ 集中して授業に取り組めると回答した児童がおよそ43%で、落ち着かないと答えた児童14%の3倍である。指導者が時間によって変わることに対する児童の抵抗は少ないと考える。
- ・ 教科担任制だと授業がよくわかると回答した児童が全体のおよそ60%を占め、分かりにくいと答えた児童を大きく上回っている。

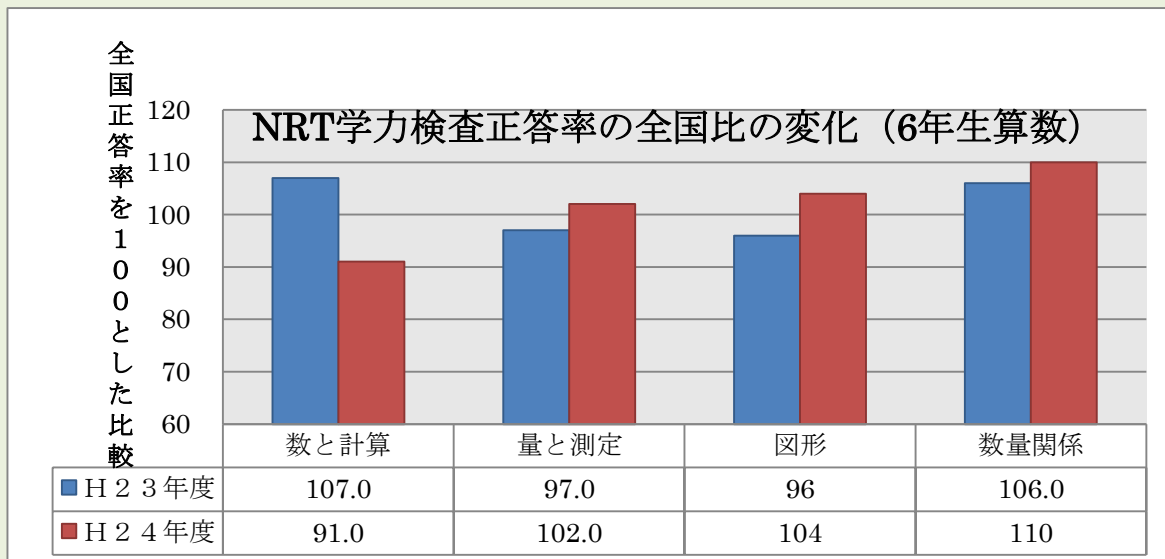
#### イ 教師による教科担任制の評価

- ・ 同一の内容を複数のクラスで指導できるので、効率的な授業展開や効果的な資料の活用、指導の改善を図ることができた。
- ・ 授業準備や学級事務等の時間ができ、効率的に仕事を進めることができた。
- ・ 学級の中に複数の教師が入ることで、担任とは違った見方で児童をとらえ、より多くの児童を生かすことができた。
- ・ 生徒指導上の問題を早期に発見し、共同して解決に向かうことができた。
- ・ 学年全体を同一の観点、基準で評価することができた。
- ・ 教材研究や授業準備に時間をかけることができ、授業内容を充実させることができた。

ウ 学力検査の結果から（平成24年度実施）



6学年を対象に行った全国学力検査（理科）の結果、本校の正答率は「観察・実験の技能」と「自然事象についての知識・理解」の2領域で岩手県及び全国の正答率を上回っていた。



NRT 学力検査の平成23年と平成24年を比較すると、6学年児童の算数の全国比正答率は4領域中、3領域で昨年の割合を上回った。

エ 今後の課題

- (ア) 来年度以降、専科の加配が入らない場合を想定し、担任外教員や少人数指導加配教員等による高学年教科担任制の継続の方法や、より効果的な運用の在り方を確立する必要がある。そのための時間割の組み方や、どの教科を担当すれば効果的であるかの検討が必要である。
- (イ) 時間割に変更が生じた場合、時間数や進度を合わせるための調整が難しい。
- (ウ) 指導内容を定着させるための家庭学習のさせ方について、教科担任と学級担任とで連絡を取り合っていく必要がある。（過重負担にならない分量、宿題の点検など）
- (エ) 教科担任の学年指導体制への関わり方について検討する。（担任団として位置付ける）
- (オ) 学力をさらに向上させていくための教科担任の授業力向上の在り方を検討する。
- (カ) 担任以外の教員と関係を結ぶことが難しい児童もあり、教科担任と学級担任との連携がより一層必要である。



## Ⅱ モデル指定校の取組から得られた小学校高学年教科担任制導入のポイントと効果

### 1 第5・6学年で教科担任制を実施する理由

- (1) 第5・6学年の児童は発達段階上、複数の教師の指導を受け入れることができる。
- (2) 第5・6学年の担任は、学習内容が高度になるため、教材研究に多くの時間が必要である。
- (3) 小学校から中学校への滑らかな接続を考えると、第5・6学年で取り入れることは効果的である。
- (4) 児童理解や生徒指導上、たくさんの目で見ることで児童一人一人のよさを伸ばすことができる。

### 2 高学年の教科担任制導入により期待される効果

- (1) 教科担任・学級担任共に教材研究が深まり、児童の状況に応じた質の高い授業実践が展開され、児童の学力向上に資することができる。(学力向上)
- (2) 教科担任と学級担任、複数の目で児童を観察することで児童理解が深まり、問題の早期発見につながり、生徒指導に役立てることができる。(生徒指導)
- (3) 中学校での教科担任制による教科指導への段差解消を図ることができる。(小中連携)

### 3 学校規模別の導入の形態

#### (1) 加配がある場合

どの学校規模でも、1名以上の加配があればその教員が特定の教科を受け持ち、教科担任制を行うことが可能になる。教科担任が受け持つ教科は、行事等の時間割変更に対応する必要があるが、加配教員の時間割変更だけで運用することができるので導入は容易である。円滑な導入のためには加配教員が必要である。教科によっては、午前中だけのように短時間の勤務の形態も考えられる。

#### (2) 加配がない場合

##### <全校6学級以下>

担当の教員が学年をまたいで指導することになり、一部の教科の交換授業を行うことで教科担任制を行うことは可能である。しかし、その場合、教材研究は2学年分のもを行わなければならないと、準備のための時間をとることも難しい。特定の教科に優れた指導力をもつ教員がいる場合には有効であるが、それ以外ではあえて教科担任制を取り入れるメリットは少ない。担当時数が少ない低学年担任が高学年の一部教科を担当することも考えられる。

##### <学年2学級>

同学年の担任同士での交換授業で教科担任制を導入することができる。その場合、教科の時数をそろえる必要があるため、高学年において可能な組み合わせは以下の通りである。

- ①国語(175時間)と算数(175時間)
- ②理科(105時間)と社会(105時間)
- ③音楽(50時間)と図工(50時間)

授業を交換することで学年すべての児童理解が深まり、指導が充実する可能性はあるが、担当する教員の教科に対する得て不得手を考慮して組み合わせを考える必要がある。担任外の教員が一部教科を担当することは可能である。

##### <学年3学級以上>

学年3学級以上の規模では、担任間の交換授業は時間割が複雑になり現実的ではない。担任外教員が一部の教科を専科として担当する形態が運用上適切である。

#### 4 導入までの過程において留意すべき点

教科担任制導入の構想として以下のことを校内で検討・確認する必要がある。

- (1) 教科担任制の目的・効果の確認
- (2) 教職員の人事の確認
- (3) 導入の基本構想の作成
- (4) 導入の計画・手順の作成
- (5) 試行的導入→評価・改善→本格導入

#### 5 教科担任制導入の具体的効果

##### (1) 学力向上

- ア 専門的な知識や技能をもった教員が教科を担当することで、指導の充実を図ることができる。特に技能教科においてその効果が大きい。
- イ 学級担任は、教科担任が入ることにより空き時間ができ、学級事務や教材研究の時間を確保することができる。
- ウ 教科担任は、担当する教科に集中して教材研究を深めることができる。
- エ 45分という授業時間を強く意識し、効率的に授業を進める視点からの授業改善を図ることができる。
- オ 学年全体を同じ規準で学習評価を行うことが徹底できるため、学習評価の妥当性、信頼性を高めることができる。

##### (2) 生徒指導

- ア 児童の指導に、学級担任だけでなく教科担任も関わることで、児童の様子を多面的にとらえることができるため、児童理解が深まり、学級経営や生徒指導に役立てることができる。
- イ 学級経営や生徒指導における問題点を早期に発見し、協同でその解決に向かうことができる。

##### (3) 小中連携

学級担任制を主としながらも、一部教科担任制を取り入れることで、中学校における教科担任制に対する抵抗感が少なくなり、小中学校間における学習面での段差解消に役立てることができる。

#### 6 加配がある場合と加配によらない場合の取組のポイント

##### (1) 加配がある場合

- ア 加配教員が教科担任に入ることにより、担任の時間割に余裕時間が生まれ、時間割編成が容易になる。
- イ 高学年の理科は実験の準備に時間がかかり、学級担任がすべてを行うことは難しい。教科担任であれば、予備実験を含め1度の準備で複数クラス分の指導ができるので効率的である。
- ウ 専門的な知識や理科の指導技術をもった教員が指導することで、実験や観察などの体験活動が充実し、児童の興味・関心を高めることができる。
- エ 2学年にまたがった教科指導は、学習内容の系統性がかみやすく見通しをもった学習指導を行うことができる。

##### (2) 加配によらない場合

- ア 少人数加配教員が学級担任と協力教授の形態で授業を行い、授業を進める主体を加配教員が行うことで、教科担任制をとることができる。
- イ 担任外の教員が教科指導に入る場合、担当の業務に支障がないように時数や教科を割り振ることが必要である。
- ウ 学級担任の交換授業による教科担任制は担当する教科や時数の調整や時間割変更等に対応する必要がある。クラスが多くなると時間割編成が複雑になり変更に対応することが難しくなる。